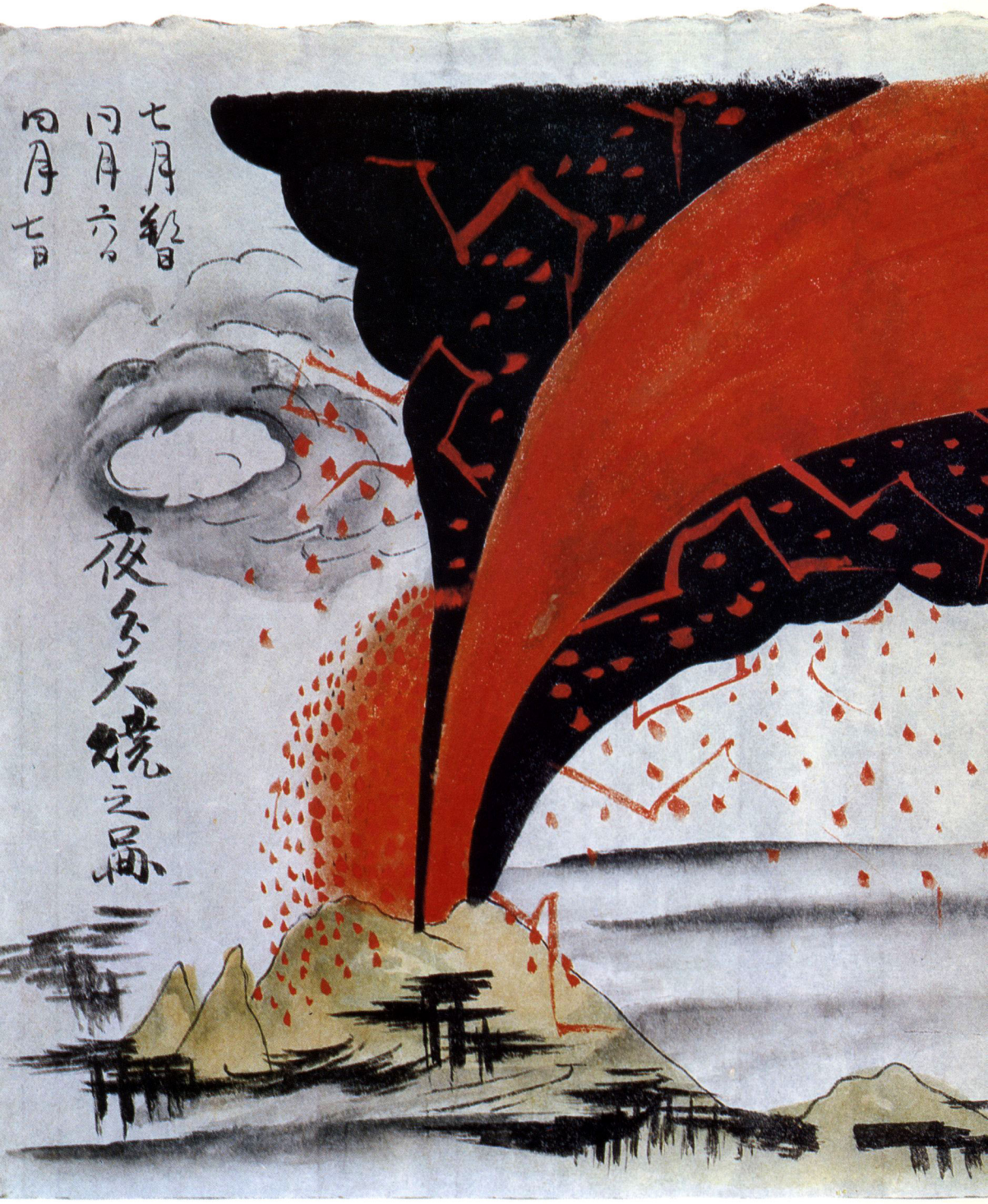

浅間山の天明噴火「夜分大焼之図」（浅間園提供）

日本のポンペイ鎌原

天明３年７月８日に浅間山大爆発の巨大な熱泥流が、北側六里ヶ原に押し出し、群馬県吾妻郡嬬恋村鎌原（カンバラ）部落を一瞬の間に押し潰し、全村が埋没した。中山道の脇往還の宿場で、戸数７．80戸の街村と運命を共にした者477名、生存者は当日他村にいた者を加え、わずか92名であった。

災害から196年を経過した。今夏、泥流の下にうずもれた旧部落の学術調査が行われたが、民家１戸が旧地表５ｍ下にあることが確認され、屋根・柱・家具・調度品など多数が発見され、部落の高い小山にあって被害をまぬがれた観音堂の石段が150段ぐらいあったという伝承を確認するために発掘調査した結果、石段を駆け登る途中で遭難したと思われる人骨２体分が出、階段は50段ぐらいしかなかったのではないかという推論に達した。

幕府は、生存者を他に移住させようとしたが、廃きょとなった焦土の上に村を再建したいという願いで、現在の村造りが行われた。妻をなくした夫、夫をなくした妻を夫婦としてめあわせ１戸をつくり、親をなくした子と子をなくした親を親子として１戸とした。結婚式はへぎに味噌を盛り、花嫁は新しいくしをさしただけだったと記録に残されている。

旧村の全部を発掘することは不可能であるが、今後継続していく過程で、火山国日本のポンペイのベールがはがされていくであろう。

（萩原　進・群馬県文化財保護審議会委員）